



## ミゼランブルー文学の無い部屋

---

一九九四年の四月、私は入学式のために名古屋市郊外の無名県立高校の門をくぐっていた。

隣には不機嫌な母親。名古屋市から遠く離れた、電車もバス停も何もかもが遠い、へんぴな田舎に連れてこられたことが不満なのだ。愛知県の県立高校は二校受験できる。第一志望だった名古屋市内の高校を落ちて、私は田舎の県立高校に入るようになった。

家の近所に、合格している私立高校があった。が、「うちにはお金がない」と繰り返す両親をみていると、私立は自然に興味の対象からはずれた。私は合格した「県立」の高校に通う。それが遠く離れた市外の高校であっても。

「ひどいところね」

母親がつぶやいた。いかにも興味がない、という風情だった。

体育館での入学式を終えると、校舎に移動して制服の採寸、教科書購入。なにしろ家から遠い田舎なのだ。指定の書店や制服を扱う店は場所がわからないし、行く手段がない。今日、ここですべてを済ませる必要があった。

午後のゆるやかな時間を、竹林に囲まれた無愛想な校舎の中で過ごす。母がすぐにイライラし始めた。

「もう帰らないと！ だから私はクルマで来たかったのに、あんたがどうしても通学経路のバスを確認したいって言うから…！ こんな田舎、帰るのにどれだけ時間かかると思ってるの！」

体育館シューズと学年色スリッパの注文が終わり、玄関を出ようとしたときだった。受験の教室で見かけた少女が私に気づいて「あっ」という顔をした。

「受かった!？」

「うん。受かった…」

私はやっと微笑んだ。

「よかったね」

少女は言った。

「うん」

友達できるかな…。

はじめて学校に上がる六歳児のように、私はそう思った。学区内で代わり映えのしない顔ぶれと暮らす、公立の小中学校がようやく終わった。

やっと自分で選ぶ、待ち望んだ新しい生活が始まるのだと思った。

「ちょっと！なに愚図愚図してんの！もう帰るわよ。何時だと思ってるの。夕方になっちゃうじゃないの！」

母親がついに怒鳴りはじめ、私は少女に手を振って学校を出た。

1

最初の校内テストで、国語の成績はいきなり一位だった。そればかりか、総合成績はクラス一位。

いわゆる「校外の新設校」で、いつかのテレビで特集していたような、「ゼロ時間目」から「七時間目」があるような学校だ。補習と小テスト漬けの学校。それだけやっても、進学率は芳しくない低偏差値校。

細長い再生紙に校内偏差値と教科ごとの点数が印字された成績表をもらうときに、担任は私を褒めた。

「この調子で頑張れ。大学へ入れるぞ」

大学に、入れるぞ。

クラス一位の成績を維持すれば、大学に入れる…。

裏を返せば、この高校で下位の成績者は、大学進学が難しいということなのだ。

週に一度の学年集会は、服装検査に校歌訓練。学年主任による熱血講話。まるで軍隊式だ。

「いかオマエら！ しっかり勉強して大学に進めないと、どうなるかわかっとんのか！ アルバイトなんかにつつつを抜かしてはダメだ。勉強だ。学校の課題をしっかりとやれば、絶対に大学に入れる！ やればできる！ さあ、ガンバロー！」

教師の熱に比して、生徒は低テンションだ。教師の熱に巻き込まれて頑張ることもしないが、反抗もしない。教師に反論できるほどキレる者はもっと上位校に行っているし、感情的に反発するような者は面接だけで入れる私立高校に行った者が多い。

何もかもが中途半端な田舎の県立高校…。能面のような表情の大人しい生徒たちと、親切で熱い教師たち。

とにもかくにも、私はここで三年間を過ごす。

主任の演説は続く。

「来月には遠足がある！ クラスの団結を高めるチャンスだ！」

私は手元のプリントを見た。

行き先は「緑地公園」と書いてある。

「遠足では、恒例のクラス対抗、大縄飛び大会だ！ みんな、放課後は練習しろよお！ 三位以内に入れなかったクラスは、席替え無しが伝統だからなーっ！」

持ち物は弁当、水筒のみ。学年色のジャージと運動靴着用のこと…。

とんでもない学校に来てしまったと思った。

その夜、中学の友人ミハラから電話がかかってきた。彼女は私が落っこちた市内の県立高校に入学している。

「新しい高校どーおー？」

ミハラはテンションが高かった。写真部に入ったという。

「なんか…遠足が大縄飛び大会なんだって。クラス対抗の。」

「ふうん。なんかあ、兄貴に聞いたんだけど、アンタが通ってる高校って、不良多いんだってえ？」

「不良…？」

「兄貴の友達がアンタの学校だったけど、学校辞めてフラフラしてるらしいよお。アタマ悪い学校らしいねえー」

私は苦笑した。彼女は口が悪い。昔からのことだ。

私が通う田舎のあの高校に、たぶんいわゆる「不良」はいない。暴れるような生徒は見たことがない。たぶん、漫然と学校に通わなくなって、フェイドアウトしていく生徒がいるのだろう。不良なんていう覇気ではなく、ただの無気力だ。半分以上が就職か専門学校に進む、低偏差値高校である事には変わらないが。

市内の高校の自慢話をいくつか聞いて、電話は切れた。

私はため息をついた。

高校の図書室を、私はそれはそれは楽しみにしていた。我が家には本がない。母は滅多なこと

で本を買い与えてはくれなかったし、かといって「小遣い」という制度も存在しなかったから、私は自分の本をほとんど持っていなかったのだ。

ミハラの家は、本なら親が喜んで金を出すという。「本を読むのはいいことだから…」と。うちはそうではない。

高校に入ったら、もうすこし難しい本も読み、小説を書く勉強をしなければならない、と思っていた。ミハラたちと、中学でやっていた「文芸同好会」のメンバーの中で、私は創作がいちばんヘタだった。

けれども悲観はしていない。私はまだ十五歳だ。十年勉強すればきっと追いつく。きっと二十五歳になる頃にはデビューしてみせる。ここから十年が勝負だ。

図書室は一階の隅にあった。入ってみるとひっそりとしていて、ひとけがない。図書委員の生徒が、カウンターで番をしながら文庫本を読んでいた。私が入ると、ちらりと目を上げた。

端から書架を見ていく。中学の図書室に較べたら、新書や学術文庫など、ずいぶん品揃えが良い。…が、忘れていたけれども、ここは新設校。開校からわずか十二年だ。あふれるほどの本があるわけではなく、空いている書架も多い。

私は少しガッカリした。けれど、気を取り直して、文芸の棚を眺めた。

いつかの高校入試模擬テストの国語の題材になっていた辻仁成、中学の国語教師が口にしていた山田詠美によしもとばなな…。

中学の図書室にはなかった、リアルタイムの現代日本文学たち。名前しか知らなかった作家たちの本を手にとる。知らない表紙を目にして感激した。私はこんなにも読みたかった。名前しか知らない新しい作家たちを。

真新しい貸出カードを出し、借りて帰った。夕陽が差し込む名鉄バスの中で、むさぼり読んだ。

新学期の席順は出席番号、つまりはアイウエオ順だ。私の名字はヤマモトだった。ひとつ前の席のヤマノさんと話すようになった。が、すぐに亀裂が入るようになる。彼女は本が嫌いなのだ。

「ヤマモトさん、ずーっと本を読んでいるのね。根暗って言われなあい？」

「本読む人って変わってるって、みんな言ってるしさ、どうなのよ？ 変な子」

私は図書室で読むことにした。

年間を通して、図書室にはほとんど生徒が来ないようだった。読書感想文の提出が必要になる夏休みだけ、借りに来る生徒が多い。わたしの国語の成績は、学内でずっとトップだった。

中学の文芸同好会の仲間で、名門お嬢様女子校に進学したアオキの話では、小学校・中学校と国語の成績で「5」をもらい続けた彼女でも、校内では真ん中ぐらいだという。図書委員を集めた読書会では魯迅の阿Q正伝を読み、私立高校合同読書会にも代表で出ることになっているという。友達はみな本が好きで、自分で小説を書いている子もたくさんいるという…。だから彼女は、書くことは辞めてしまった。優秀な生徒たちのあいだで、ただの本好きとして暮らしている。

話を聞くだに、愕然とした。この高校で、魯迅なんて固有名詞を知っている者が何人いるだろうか。

たぶん校内の誰も魯迅を知らないな…という確信は、秋になって深まった。

学校祭の出し物決めのときのことだ。学校祭といっても、進学校や私立高校のように華やかなものではなく、「文化発表会」というのだ。芝居でもやるか…という空気が流れた。

私は手を挙げた。

ずっと憧れていたものがあつた。学級委員のスガくんが私を当てた。私は立ち上がった。

「レ・ミゼラブルがやりたいです」

教室が水を打ったように静まりかえつた。スガの目が点になった。

「は？ ミゼラン…何？」

「レ・ミゼラブル！」

私はハッキリと区切って発音した。

「レミ…わかんね！」

私は今度は邦題に変えた。

「日本語だと『ああ無情』。ユゴーの」

スガはキョトンとした。

お手上げだ、という顔になって私に背を向け黒板に向き直つた。

白墨が動く。

『ミゼランプル』

そう、黒板に書き付けた。

私は着席した。もう何も言う気持ちになれなかつた。学級会は進み、気がつくとも芝居の案は流れて、賛成多数で「お化け屋敷」に決まっていた。私には枝の作り物を持ってガサガサと驚かす役が与えられた。

図書室で文芸誌の「鳩よ！」をめくっていると、背後に人の気配があつた。珍しい。振り返ると、腰まで届こうかという長いクセ毛を後ろで束ねた、小柄で細身の少女が立っていた。

私が振り返ると、彼女はにっこりと笑つた。

「私、C組なんだ」

「ミヤギさん…だよね？」

クラスは違うが、名前ぐらいは知っていた。それに図書室で何度か見かけたことがある。たしか文芸部の部誌にも名前があつたはず。この学校で数すくない、読書する人だという認識はあつた。

雑誌棚の長椅子に腰掛けている私を、彼女はニヤニヤしながら見下ろした。

「学級会で、レミゼを提案したんだって？」

「ああ…」

私は苦笑した。他のクラスにまで伝播していたのか。ヤマノはC組に仲良しがいるから、きっとそこから伝わったのだろう。

「いつも図書室にいるでしょう？」

ミヤギは言った。

「うん」

私はうなずいた。

「私ね、太宰が好きなんだ。全部持ってるんだよ。あなたはどんな作家が好きなの？」

太宰…！

この学校に来て初めて出会う、文学少女だった。

「特に巋の作家は無いけど…。好きな作品は山本有三の『路傍の石』と三島由紀夫の『金閣寺』。あと、ヘッセとか」

私はどきどきしながら答えた。

「そっか」

彼女は真っ白い顔で、熱のない表情で笑った。

私は長椅子を少し詰め、彼女が座れるようにした。しかし彼女は座らなかった。

「じゃあね」

それが会話を交わした最初だった。

2

あっという間に月日が流れ、大学受験を控えた三年生になる。「図書室ともだち」になったミヤギと、ついに同じクラスになった。クラスが同じになると、私たちは急接近。休み時間も教室移動も、ほとんど一緒に過ごすようになる。

彼女は変わり者だった。

そして、変わり者で構わない、と思っているのだった。

「ねえ、破滅って何だと思う？」

大人びた彼女の問いは、私には難しすぎた。

「うーん……。男と女で違うんじゃないの？」

「どういうふうに」

「男だとホームレスになっちゃうけど、女の人はそのまで転落する人はすくないよね」

そう言ったら、彼女はひどくガッカリした顔をした。どうやら正解は違うらしい。

「もっとこう……切実なね」

「切実？」

「そう。つまり道化のような……。道化って、悲しいものなんだよ。わかる？」

「……………」

私は太宰は好きになれなかったし、だから彼女の言わんとすることをすべて理解することはできなかった。

けれど、彼女とのそんな会話の時間は好きだった。

文芸部に所属している彼女の短い小説は、学校誌や部誌に載っていたので読んだことがある。難しい漢字をたくさん使った、二頁ほどの小説で、それを読んだ文芸部の顧問に「頭がおかしいんじゃないか」と言われたとかで、彼女はひどく怒っていた。彼女の小説で、私は「畢竟」などという単語を覚えたりした。

当時の私は週に二十時間以上を小説の執筆や勉強に費やし、創作一色の生活を送っていたが、ミヤギに見せたことはなかった。見せまい、としていたのではない。見せる機会がなかっただけだ。

それに、当時の私は「文学」から遠ざかりかけていた。家に帰るとライトノベルを読み、ファンタジー小説を書いていたのだ。十八歳になり、さすがに己の才能の限界が見えるようになっていた。純文学でデビューするのが、どんなに難しいことかも。

「とにかくプロになるんだ」

ライトノベルを書いて、雑誌に投稿する生活。それまで読んだことがなかったライトノベルを、市立図書館で片っ端から借りて浴びるように読み、設定や書き方を考えた。授業中はノートの隅にプロットを切る。

「高校三年生の夏は天王山だ！ 受験に集中しろーっ！」

学年主任の熱血講話は、月イチのペースで続いていた。が、相変わらず校内には熱がない。山のような宿題を肅々とこなし、終われば本を読んで小説を書く。いまの成績であれば、どこか四年制大学には引っかけりそうだった。女子の進学が「短大」から「四年制大学」主流に切り替わ

りつつある時期のこと。友人には短大志望も多い。有名大学が短大をつぶして四年制に切り替えている時期でもあり、閉鎖が決まった有名短大は入りやすくなっていた。あの高校からでは考えられないような「ブランド学校」の短大に入ったクラスメイトもいた。

一九九六年夏。すべてが卒業に向けて動きはじめていた。夏の日のテニスコートで、部活動の卒業アルバムのための写真撮影。

スコート姿でコートに現れた私を見て、通りがかった国語教師が驚いていた。

「ええーっ！ あなたって文芸部じゃなかったのー！？」

「……はい。そうなんです」

「テニス！？」

「一応……」

とにかく、もうすぐすべてが終わる。

秋になって、文学部には行かないと決めた。希望していた文学部哲学科の受験を母の猛反対で断念し、もう何もかもどうでもよかった。哲学科に行けないのなら、どこだって同じだ。適当に受けて、受かったところに行く。でも、文学部へは……国文科へは絶対に行かない。

国語の授業も嫌いだった。舞姫を何ヶ月もかけて延々と読む。眠くなるばかりだ。テストは簡単で、授業を聞いていなくても解ける。私は国語が嫌いで、文学も嫌いになりかけていた。本を読むのは根暗扱いで、感動しても語り合う相手は少なく、それよりもテレビドラマや流行の音楽を知っていなければ学校生活はおぼつかない。

もうすぐ最後の「文化発表会」の季節がやってくる。しかし芝居はやらないだろう。文学の無い部屋、文学の存在しないこの校舎の中で、流行とカラ騒ぎだけを覚えて高校生活が終わる。

「ミヤギくんは文学部なの？」

ある日の体育館で、バレーボールのグループ対抗の試合を待ちながら、尋ねてみた。

「心理学。臨床心理士になりたいの」

「リンショウシンリシ……」

知らない単語だった。

はっきりと職業まで意識して進路を考えている彼女は、自分よりずっと精神的に大人だと思った。

「心理学だと……愛知学院大学？」

何しろ低偏差値高校だ。国公立大学などは夢のまた夢。私立大学であれば、当時の愛知県では心理学といえば愛知学院だった。それでも、心理学は人気があって、同校の他学部に較べて偏差値は高い。ミヤギの成績を知っている私は心配になってしまった。大丈夫なのだろうか。

ミヤギは首を振った。

「たぶん東京かな」

「東京！」

「引っ越すの。卒業したら」

「進学で上京じゃなくて？」

「そう。家族が。みんな引っ越すんだ」

彼女の言葉をどこまで信じられるかはわからなかった。彼女はプライベートは話したがらない。私もムリに尋ねることはしなかった。夕食が夕方四時からなので、学校が終わると大急ぎで帰る……というくらいしか知らない。私たちは本の話しかしない。文学だけでつながっている、友情とも同情ともつかない、淡く形容しがたい関係だった。

「でも、たぶん私は二十歳までは生きていないな」

ミヤギが言うので、私は彼女の顔をまじまじと見つめてしまった。

「年を取って生きていたくない。太宰の年は越えたくないの。だからたぶん、臨床心理士になるまで生きてないな」

返答に窮した。

彼女は話題を打ち切った。

「つまらないねえ」

バレーボールの試合が淡々と進む体育館の光景を長めながら、ミヤギがつぶやいた。

「そうだね」

私は相づちをうった。

「なんか詩でもつぶやこうよ。なんか暗唱してる詩、ない？」

また彼女の「無茶振り」だった。

「んー……」

私は少し考えて、遠い昔に読んだきりの詩を脳の片隅から引っ張り出した。

ふらんすに行きたしと思えど、ふらんすはあまりにも遠し

せめては新しき背広着て、気ままなる旅にいでてみん……

萩原朔太郎だった。ミヤギは喜んだ。

隣のミヤギがずっと手を伸ばしてきた。

「ねえ、手を握ってもいい？」

ドキドキした。

「……………いいよ……」

ミヤギの細くて白い手が私の手に触れた。私はそっと握り返した。

居場所のない三年間。私たちは気が合うわけでも、趣味が合うわけでも、休日に会うわけでもないけれど、ただ孤独だけでそっとつながっていた……。

たぶん、これは自己愛だ。青春特有の淡く絡み合った想いが心を刺して胸が痛い。

三年生の文化発表会はクイズ大会のアトラクションだった。私はすっかり嫌気が差している。名門女子校のアオキは読書発表会の準備で忙しいというし、市内進学校のミハラは写真部の展示準備と芝居出演らしい。

然るに私のクラスはクイズ大会。芸能人に関する○×クイズをする……という企画を、ほとんど手伝った記憶がない。一応、店番すべき時間帯が振り当てられたが、元気の良い男子生徒が率先して仕事しており、居ても居なくてもいいような役割だ。

教室内でしみじみと進むクイズ大会を、私とミヤギは教室の後ろの余った椅子に腰掛けて、ぼんやりと見ていた。

他のクラスでも、進学校にあるような「高尚」な企画をやるようなところはない。熱のないアトラクションか、資料を大きな模造紙に引き写しただけの発表程度。退屈だった。

窓の外を見た。

雨上がりの校庭が濡れて光っている。

「外いこうよ」

ミヤギが言い出した。

「うん。行こ。」

文化発表会は校舎内だけを使う決まりで、校外に出ることは基本的に禁止だ。だがもう、ど



うだっていい。この退屈から逃れたい。喧騒のなかの孤独より、静けさの中の二人だけの孤独のほうが、何百倍もマシだと思った。

校内ばきスリッパのまま、階段を下りて土間から校舎を出た。青空がまぶしい。日差しは意外にあたたかかった。

深呼吸する。

やっと息ができる、と思った。

校舎内の喧騒が、窓から微かに漏れてはいたが、風に乗って竹林のざわめきが聞こえていたし、時折、遠くを名鉄電車が走っていく規則正しいレールの音が響く。

静かだった。

田舎の静けさに包まれて、ふたりは怒るでもなく悲しむでもなく、愚にもつかない話をしながら、ぐるりと校舎の裏側へと歩いた。

この学校に…いや、この世界に、いまやたった二人しかいないかのようだ。

テニスコートへ上がる石の階段に腰掛けて、ふたりは空をあおぎみた。

疲れたね。

声は出さないけれど、彼女の顔にそう書いてあった。フィナーレの喧騒に、疲れてしまった。あと半年で、私たちはこの校舎を去る。進学先は未だ決まっていない。

「ねえ、キスしていい？」

唐突に彼女が言った。

「え？」

私が動揺したのを見て、彼女はおもしろがっていた。

「キスしてもいい？って言ったの！」

意地悪な彼女の笑みを見ていて、負けてはいけないという気持ちになった。

私はセリフを探した。

「いいよ。ディープじゃないなら…」

今度は彼女がうろたえた。

「…すごいこと言うんだね。やだ、私が動揺しちゃったじゃない」

顔を見合わせた。

見ているのは太陽と木々だけだ。

キス…するのだろうか。

沈黙が流れる。

と、そのとき。

「こらあーっ。そこでオマエら、何やっとる！」

拡声器のダミ声が、空気をつんざいた。

学年主任が拡声器を持って、走ってくるのが見えた。

「外に出るのは禁止だと言っただろうがあーっ！！」

私たちはあわてて立ち上がった。

「はい。すみません」

素直な私は思わず頭を下げたが、彼女は学年主任の教師には視線もくれず、サッサと歩きだしていた。私が顔をあげたころには、彼女の姿はもう遙か向こう。私はあわてて走って追いかけた

。

卒業式はあっけなく終わった。

私は「キミなら絶対に行ける！」と教師たちに太鼓判を押された公立大学受験を失敗。前期、後期日程ともに落ちて、結局、私大の法学部に進学することに決まった。法学部が何をするところかは、知らない。

ミヤギがどこを受けたのかは知らなかった。

「どうだったの？」

受験のためと思われる休みの日の翌日に聞いたが、彼女はニヤニヤするだけだ。

「落ちた。落ちたね」

だから私は、彼女の進学先を知らない。愛知県にいないことは確かであるようだが、家族ごと引っ越したのか、引っ越し先が関東なのか、全くわからない。

風の噂で、本意ではない心理学部でない学科で大学に入学はしたが、仮面浪人して他の大学へ移った…と聞いた。が、これも定かではない。

「二十歳までは生きていたくないな」

と、言った彼女の言葉を、当時も今も私は信じていない。それは文学にかぶれた者の、ちょっとした錯覚だ。きっと彼女は生き続けるだろう。そして…と、「写ルンです」でクラスメイトたちとの卒業写真を増やしながらか、一八歳の私は夢想した。

いつかミヤギアキコの名前を、どこか文芸誌で見る日が来るかも知れない。私も努力して作家になっていたなら…どこかで…それがどこかはわからないけれど…どこか華やかな場所で、再会することもあるだろうか。

\*

そうして彼女との話は一九九七年の愛知県で終わる。あれから十三年が経過したが、ミヤギアキコの名前を、私はいまもって文筆業で聞かないし、私も作家にはなれないままだ。太宰治の肖像を見るたびに、彼女の白い横顔を思い出す。モーツァルトを「モオツァルト」と書いた答案で×になったと怒っていた、あの日の彼女の横顔を。

彼女との写真は一枚も持っていない。